

---

# Missing Last Piece

海上なつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M i s s i n g   L a s t   P i e c e

### 【Nコード】

N 3 7 0 1 G

### 【作者名】

海上なつ

### 【あらすじ】

「この世で一番美しいものは何か知りたくないか？」――ヴェルナンド探偵と自称”優秀なお手伝いさん”のリーシャは、ある手紙がきっかけで双子の兄弟に力を貸すことに。不可解な謎を解きながら二人は意外な結末を知る。そしてそこから考えた真相はそれぞれの解釈によって異なるものだった!?

## PIECE 1..手紙

窓越しに朝の光を浴びて、ヴェルナンド探偵はその長い体を伸ばした。

「おはようございます、先生」

まるで太陽を手本にしたような微笑みを見せた少女は、自称”優秀なお手伝いさん”のリーシャだ。彼女は探偵を慕い、彼の所に来た依頼には必ずと言っていいほど熱心に耳を傾けて、時々口をはさんだりもするのだが、あくまで”お手伝いさん”で、”助手”ではないと本人は主張している。

「朝食の用意は出来ています。飲み物はどうされますか？」

「ありがとうございます。紅茶を頼むよ」

「分かりましたあ！」

リーシャは返事をする、薄茶色のショートヘアを揺らしながら、踊るようなステップでキッチンへと向かった。

ある事件がきっかけで探偵と知り合った彼女は、それから毎日探偵が起床する時間にここへ訪れて、勝手に朝食を作ったり部屋の掃除をしたりするのが日課になっていた。探偵は最初、毎朝ドアを激しく叩いて起こすリーシャをよく思っていないかったのだが、どうしてもそれを止めようとしないので、合鍵を彼女に渡して自由に入り許すことを許したのだった。しかしリーシャは本当によく働いたし、自分に対する強い気持ち伝わったので、信用することはそう難くないことだった。その証拠に、今の探偵はリーシャに感謝あ  
るのみだった。

たちまち部屋には紅茶の香りと湯気が漂い、暖かい空気に包まれた。

探偵はいつものように用意された朝食を一通り口にしてから、リーシャの変わらぬ料理の腕を確認したところで、郵便受けを見て戻

つてきたリーシャの異変に気づいた。

「どうしたんだい？」

「食事中にすみませんが先生、真っ白な封筒の不審な手紙がポストに……切手も貼られていませんし、恐らく誰かが直接入れたものだと思います」

探偵が中を開けると、そこには何かのHPのアドレスと短い文章が書いてあるだけだった。

『この腐った世の中で一番美しいものが何か知りたくないか？

その答えがある場所はコンピュータを使えば分かる。

ただしパスワードが必要。次にヒントを記す。

PRの中 8のB』

「誰かの悪戯ですよきつと！捨ててしましましょう！」

リーシャはひたすら気味悪がったが、一方探偵は対照的な態度をとった。

「いや、面白いじゃないか。ちょうど今日は丸一日予定がない。たとえ悪戯であっても、退屈するよりマシってもんさ」

「……ですかねえ？」

探偵はテーブルの上に乗ったノートパソコンを立ち上げ、手紙に書いてあるアドレスを慎重にキーボードで打っていった。

「確かに……パスワードが必要らしい」

現れたページは真っ白で、何かを入力するスペースだけが存在していた。

リーシャは画面を横から覗き込んで言った。

「一体誰がこんなこと！——先生、やはりこの”PRの中 8のB”っていう暗号を解くしかなさそうですね」

「そうだな……前半部分は分かったんだが、後が何だか」

「えっ！私は、後半の予想はついてます。最初の”PRの中”は何なんでしょう？」

「そのままだよ。アルファベットを思い浮かべてごらん」

「――ああ、なるほど！ 案外簡単だったんですね。後半も単純なものです。こうして読みを書いてみると分かりやすいですよ」

リーシャはメモ用紙を持ってきて、『ハチのビー』と書いた。

「つまり……」

それを手で制する探偵。やられた、という顔で笑っている。

「前半と後半を合体させると一つの生き物になるな。これが答えか」

「でも先生、全部で7文字の英数字になりますが、普通パスワードは偶数ではないでしょうか？」

「まあ、とにかく入れてみよう」

探偵は再びキーボードを叩いた。

## **PIECE 1..手紙(後書き)**

物語の基本構成は、一つの謎と前の答えを一話ごとに入れていく予定ですのでできたら一緒に解いてみて下さい。

これからもヒントは文中に会話などで入れるつもりです。

## PIECE 2..建物

しばらくして画面でOKの文字が点滅した。

それを見てリーシャは嬉しそうに言う。

「やはりパスワードは”queenbee”——女王蜂のことで正解だったようですねっ」

「うむ。すぐ先に進んでしまっってはつまらない。少し説明してもらおうか」

「はい！」

リーシャの返事の良さは気持ちにいつも比例する。それだけでなく、表情・行動・言動、全てにおいて感情が表に出やすいところがあるのだ。

やがて、得意げに人差し指を上に向ける。

「まず前半の”PRの中”というのは、アルファベットの”P”と”R”に挟まれている”Q”のことを示しています。そして後半の”8のB”は、”蜂のbee”と解釈します。そして”Q”はトランプで”queen”のこと。これらをくつつければ先ほど口にした答えになるわけです」

探偵は少し笑って頷いた。わざわざリーシャに説明させたのは、乗り気でない彼女に謎を楽しんでほしいという思いがあったからだ。案の定、解けた嬉しさで不安は隠れたようだ。

一見奇妙で不可解なことでも、事実がそうとは限らない。あまりに意外すぎる単純な答えほど人は思考がまとまらず、自身で迷って難しくしてしまっている場合もある。しかしその結果、答えを知った瞬間の脱力感でさえも気持ちがいいものだ。

「先生、見て下さい」

次に画面に現れたのは隣町の住所だった。

しかし調べたら、ここからそう離れてはいないことが判明した。車を走らせたら二十分程で到着するという。

リーシャは少し渋ったが、結局探偵の車に乗り込んで、二人は出発した。

狭い路地に入ると、何やら黙って考え込んでいたリーシャはやつと「先生」、と真面目な顔でつぶやいた。

「パスワードって普通、自分だけ意味が分かるような言葉や数字を使うと思うんです。今回の”女王蜂”という言葉が、”いつも大勢に囲まれて、その中心的な存在になっている女性”という意味だとすれば、少なくともこのパスワードを考えた人はそういう人——あるいはそういう人物と関わっているのではないのでしょうか？そしてこの件には裏で複数の人が携わっているのではないのでしょうか？…：そんな私は考えすぎですかね」

探偵は少し迷ってから言った。

「もしも何か重大な事件のようだったら、君を巻き込むわけにはいなくなる…。でも今のところ、その可能性は少ない。だから気楽に楽しもうじゃないか。我々は最初からそのつもりだったのだからね」

「そうですね。でも、これでただの悪戯だと分かった時も悲しいです」

「ははは、その時はドライブに来たことにしよう」

「あ、それはいいですね！せっかくなので買い物もしましょう」

「そうだね」

探偵は口では同意したものの、内心はこう思っていた。悪いがその気はないよ、と。単なる悪戯で終わらぬ何かがあるという、確信に近いものを抱いていたからだ。その動機が直感であるにしろ、とにかく真実を知るにはどうにもならない移動時間の中で不安を抱いた者と居るよりは、お互い楽しく待つ方がいいに決まっているのだ。リーシャは器用に鼻歌を歌い始めた。

「——ここですね」



目的地に到着して、リーシャは妙に低い声で言った。

「そのようだ」

探偵は頷いて車を降りた。リーシャも後に続いた。

二人の目の前には、三階建てのコンクリートの家が建っていた。

「ここからでは見えにくいですけど、上に柵がありますね。きっと屋上があるんですよ。……それにしても、この通りは人が少ないですねえ」

探偵は数分周辺を観察すると、ついにドアを叩いた。

ドアに耳を近づけて中の様子を探ろうとしたリーシャは、慌てて何かを倒したようなカランという音と、誰かがこちらへ向かって走ってくる足音を聞いた。

やがて建物の内側にいる何者かが声を発した。それは外にいる二人の所へ響いた。

「ミカンの一つ、レモンは二つ、リンゴは三つ――。この法則に従って、ナシを買って来てほしい。正しい個数を買ってきたならばドアを開ける」

リーシャはあからさまに嫌な顔をした。顔すら合わせていない他人に、どうして頼まれ事をされなくちゃならないのよ!、と思ったからだ。しかし探偵はその謎を考えている最中だったので、小聲で小さな文句を言うだけにしておいた。

「バナナなら……安いのにい」

「それは問題外だ!」

地獄耳!、とリーシャは思ったが、口にしなかった。

「八百屋はすぐ右手に見えるだろう。さあ、入りたいなら早く買ってきてくれ」

とりあえず二人は、言われた通りの八百屋へと向かった。

「あのお、違うと思いますけど、一応……」

「ん、何だねリーシャ?」

「もしかしたら、駄洒落で……」

「いや、それは違うと思うな」

「ですよ」

すぐさま否定してくれた探偵に、リーシャは密かに感謝した。

「それじゃあ一体、ナシは何個買えばいいのでしょうか？」

「それぞれの果物を変換してみて、何かに注目してみようか」

そうこうしているうちに、八百屋に到着した。

今にもつぶれてしまいそうな活気のない小さな店だったが、とり

あえず今は目的のものを買うことにした。

「すみませ〜ん！」

そう言ってお店の人を呼んだのは、満足げな顔のリーシャだった。

### **PIECE 3..兄弟(前書き)**

前回の解説。バナナが問題外ということは、変換できないということ。果物を「漢字」に変換して、それぞれ共通する「木」の数だけ買うのです。

### PIECE 3..兄弟

二人は例の建物まで戻ると、再びドアを叩いて叫んだ。

「ナシを一つ買ってきました!」

すると今度は、微かにトツ、トツ、という一定の短い音がしたかと思うと、それに続いてガチャツと重々しい鍵を開ける音がした。そして、中からゆっくりと顔を覗かせた人物がいた。それは髭をはやし、片足に包帯を巻いて杖を持った男だった。青年と呼ぶには若すぎる気もするが、それほど老いてはいない。

「入ってください」

彼は片手でナシを受け取って、二人を家の中へ招き入れた。

「こちらのお嬢ちゃんは?」

探偵が何か言う前に、リーシャは胸を張って自分から紹介した。

「先生の優秀なお手伝いさんです!」

「そうだったか……しかしお二人さん、先ほどは無礼な態度をとってすまなかったな」

男の打って変ったような態度に、リーシャは少し戸惑った。

「もしかしたらここに、あまり年の合わない兄弟がいらっしやるのではないですか?」

「確かに、私には弟がおります。しかし、どうして……」

「最初に僕がドアを叩いた時、戸口まで急いで走ってくる音が聞こえたのです。しかし迎えてくれたあなたは足を怪我していてそれが出来ない——そこで中に二人はいるのだと思いました」

「先生、ではなぜ兄弟だと思いに?」

「リーシャ、君だって、最初の出題者と戸を開けた人物が同一だと思っただろう? なぜなら声や口調が似ていたからだよ。ここまで違和感がないのは、血のつながりがある者同士である可能性が高いと思っただからだよ」

「なるほど」

そこでちょうど上から声がした。

「兄さん、どうした？」

「来客だ！」

探偵とリーシャの傍にいる兄の方が返事をする、すぐに上から慌てたような足音がした。

降りてきた男が二人に気づくと、ぶっきらぼうに「早かったな」とだけ言った。

「わあ、顔もそっくり！」

リーシャが思わず叫んだのも無理はない。目の前には二つの同じ顔が映ったからだ。兄の方が足を怪我してさえいなければ、瓜二つである。

「私たちは一卵性の双子でしてな——こっちは弟のトレントで、私がデオット。見た通り、私の足は不自由で咄嗟の行動が出来ない。あんた方が来られた時、私が誤って杖を落としてしまったので、トレントが代わりに戸口へ向かったのだ」

「そうでしたか……。紹介が遅れましたが、隣町で探偵をしています、ヴェルナンドです」

「聞いたことくらいはあるんじゃないですか？ 私たちの町では、先生は名の知れた探偵なんですよ！ あっ、ちなみに私は先生の優秀なお手伝いさんのリーシャです」

トレントはただ興味のなさそうに無表情でどこか違う所を見ていた。

リーシャは即座に彼を睨んで、双子の見分け方を学んだ。愛想が悪いのがトレントだ。

「無造作に選んで実行した単なる悪戯ではなくて、僕自身に用がおりなのですね？」

「ああ、実はそうなのです。少し事情を聞いていただきますかな——さあ、こちらに座ってください」

二人は薄汚れたソファに体をあずけた。

やがてトレントがやってきて、前のローテーブルに綺麗に切られ

たナシと、四人分の飲み物を置く。兄弟と探偵の分はコーヒー、リーシャは水だった。

「勝手に出したが、コーヒーで良いかね？」

「はい、もちろん」

探偵だけにそう確認すると、そのまま椅子に座った。

リーシャは何だか悔しかった。自分にコーヒーが出ないのが、子供を否定されているようで惨めだったからだ。

そろそろ我慢するのも嫌になって、悔し紛れに水を一気に飲みほすと、探偵に小声で訊いた。

「先生、先ほどは突っ込みませんでしたでしたが、あの時点でなぜ悪戯でないと言いきれたでしょうか？もしかしたら今も内心、私たちを嘲笑っているのかもしれませんが」

探偵はそんなリーシャの複雑な心は読めず、真面目に答えた。

「デオットさんが僕らを見た時、リーシャのことを訊いただろう？それは僕のことを知っていて、一人で来ることを予想していたからだ。そして探偵だと知った上でわざわざ力量を試すためにこんなことをしているなら、本当に解決してほしいことがある証拠だよ」

「……すみません」

どうして謝るんだい？、と探偵が訊く前に、デオットが咳ばらいをして注意を向けた。

「まず、ママの存在を話さなくてはなりません」

そこで一度深呼吸をすると、また口を開いた。

「ママは私たちの本当の親ではありません。親に捨てられたり、理由があつて住む場所を失った者たちを施設にあずけて救ってくれた一人の女性のことを、皆”ママ”と呼んでいたのです。私たち兄弟も長いことその一員であり、産んでくれた母親の顔など知らぬ環境で子供の時からママに育ててもらったのです」

トレントはそこでつけ足した。

「施設というのは、実はこのことで、一緒に暮らしていた”家族”たちは自立して社会人となったり、養子にもらわれたり、事故死

した者もあり、今ではもう俺たち二人しかいないのだ」

「元々ママは普通の家庭を築いておったが、子供を産めぬ身だったという。だから夫が早くに不慮の事故で亡くなって莫大な遺産を相続された時、住んでいた夫婦の家を売って、わざわざこの目立たぬ町にひっそりと建てたのです。私たちは皆幸せに暮らしておりました。しかし五年前にママが病で倒れた後の病室で言いました。『あなたたちと過ごした毎日は本当に素晴らしかった。私が心を失くしても、忘れてはならない美しいものがこの世には残ります。屋上行けば分かるでしょう』と……。それがママの最期でした」

しばしの沈黙の後、デオットは「しかし困ったことがあるのです」と続けた。

「万が一辛くなった家族の誰かが自殺するのを防ぐためだったかは定かではありませんが、元々屋上は出入り禁止だったのです。鍵がついているだけでなく、三桁の数字を合わせなくては開かない厳重な仕組みになっておりました。屋上へ行くのにあたり、その鍵の在り処と暗証番号を示してくれました——これがそうです」

探偵に一枚の紙切れが渡された。

『The early bird catches the worm.』

だが鳥を狙う隣の奴が鍵を隠し持つ

暗証番号は本のしおりの孤独な数字』

「これは……!？」

「暗号のようなのです。ママはそういうのが好きな方でしたから」  
それから改めて探偵の方へ向き直ったトレントが声を出した。

「悪戯だと疑われても仕方がないような野暮なマネをして、本当に申し訳なかったと思っている。あんたがどんな方か知りたくてやったのだ——こんなくだらない私的なことに手を貸してくれるかどうかどう

か。しかし俺たちにとってはたいへん重大なことなのだ。どうか分かってほしい」

「それはもちろん、喜んでお力になります。しかし五年もの間、誰も到達できなかったというのは妙ですね。お二人のように誰かに相談しようとして試みた人もいそうなのに」

「それは私たちが初めてです。それは多分、皆が心のどこかで他人に甘えっぱなしの人生を恥じていたからだと思います。私どもも『これ以上は頼めない。自分の力で』と、今まで遠慮してきました。しかしもうそんなことを気にしている場合ではありません。ママの最後の言葉が無意味となってしまうのを避けるために、ようやく羞恥心を捨てて、こうして探偵さんに相談しようと思ったのです……本当にプライドだけは高くてこんなに遅くなってしまつて。それともう一つ、知りたくない気持ちもあったからでしょう。ママの死を改めて肯定するようで、何だか怖かったです。まあ、どちらにしろ情けない理由ですがね」

トレントはフォローするように事実を口にした。

「無論、家族全員で協力して解こうと、まず怪しい”本のしおり”があるか探してみた。しおりは和紙製のものがところどころに本に挟まっていたし、本は三百冊は裕に超えていて、本自体についている紐のしおりも合わせると相当な量だった。しかしついに、私たちは裏に文字が書かれたこのしおりを見つけたのです」

そういうと、トレントはまた探偵にものを手渡した。

『無意味な散策御苦労さん』

これを見たリーシャは特に何も言わず、ただ二人の顔をうかがつた。そしてすぐにデオットやトレントから真剣さを感じると、空気を察して笑うのは諦めた。

「きっとこれが重要な手がかりなのです」

「そうですね……何か分かりそうな気がしてきましたよ」



「本当ですか！探偵さん、どうかよろしくお願いします」

よく知りもしない双子の男性二人にせがまれても表情を変えず、むしろ謎を目の前にして明るくなった気さえする。リーシャはそんな探偵の様子を見て、今まで馬鹿にしていた自分が恥ずかしくなつて、うつむいた顔を少し赤らめた。

## PIECE 4…入口

「暗証番号から解いていこう」

「先生、それは『無意味な散策御苦労さん』の孤独な数字』のことですよね？つまり、初めにしおりの一文の意味を解読しなければならないわけです」

リーシャは気を取り直して意見を言った。

「その通りなんだが——ところで、”8のB”の暗号を考えたのはどなたですか？」

「ママが…前に私たちに教えてくれたのです」

デオットがおずおずとした態度で言った。

「それなら、今回の暗号も簡単に解けるはずですよ。まあ、解いたりーシャにも言えることだが」

探偵以外の三人は、首をかしげて考えた。

「注目すべきは、答えが数字になるということです」

そこで「あっ」と声をあげたのはリーシャだった。一寸遅れてデオット、トレントがお互いにはっとして顔を見合わせた。

「”無意味な散策御苦労さん”は、”61373395963”と数字に置き換えることができるのです」

「なるほどな。確かに作りが似ている」

トレントはすぐにその数字をメモし、二つ以上あるものを消していく。その作業が終わると、「兄さん」とつぶやくのを受けて、デオットが叫ぶ。

「175——孤独な数字はこれか！」

その言葉を合図に、部屋にいる皆の表情が緩んだ。

「後は鍵を見つけるだけですわね！」

探偵はリーシャの言葉がきっかけで辺りを見回してから、兄弟に問いかけた。

「ここに、猫が描かれたようなものは？」

「ありませぬ。あったら、とつくに調べていたことでしょう」

探偵はすぐに同意した。”鳥を狙う”という言葉だけで、真っ先に想像するのは猫であるというのは同じらしかった。しかし実のところ、探偵にはそう訊いた理由が他にもあった。それはすでに暗号を解き、そうだという確信を得たからだった。

「屋上にも、猫関係の置き物などはないのですね？」

「はい」

「念のため調べようと思うのですが、よろしいですか」

「もちろんです」

そこでトレントはデオットの脚をちらと見た。

「兄さん、俺らはここにしよう。探偵さんもその方が集中できるだろうよ」

そして故意に探偵と目を合わせた。すぐに探偵は頷いてそれを返事に代えた。

「申し訳ないな。何かあったらすぐ言ってください」

兄弟が個々の部屋へ戻ると、残った二人は、屋上へ導くための階段を上っていった。

リーシャもその後が続いてゆつくりと足を動かしながら、自分なりに思考を巡らせることにした。

最初の一文は、”早起きは三文の得”という意味である。が、次の文で”鳥”が出てくることから、重要なのは英文の一語一語であるのかもしれない。

「わっ！」

リーシャは急に悲鳴をあげた。とほぼ同時に、強打した体の痛みが伝わった。

「大丈夫かい！？」

探偵は振り返り、足を踏み外してうつ伏せに唸るリーシャを抱き起こした。その眼には涙が滲んでいた。

「す、すみません。考え事をしていたら……」

「いや、ここの階段は特別だよ。段差が明らかに通常よりもあるん

だ。そのことを意識しないと僕ですらつまずきそうになる。上る前に君に声をかけていればよかった」

確かに見かけは普通のコンクリートの階段だが、無意識のうちに足をいつもより高く上げていたようで、呼吸が少し乱れていた。

「先生、もう大丈夫です。気をつけますから」

そう言って笑ったはずだったが、痛みを我慢していたせいで、見たこともない表情をつくりだしていたのを本人は知らなかった。

そして最上階。屋上を仕切る扉には案の定鍵がかかっていて、暗証番号を入力する場所も存在した。赤く光った小さなランプが、立ち入りを拒絶している。

探偵は長い指を伸ばして、そこに正しい番号を三つ続けて押した。すると、あっけなく赤いランプは消え、大人しくなった。

今度こそ本物の笑顔を見せることができたリーシャは、切り替えが速く、すぐに次のことを考えて口にした。

「部屋を見た時、猫の形をしたものなどなかったように思いましたが……やはり猫と決めつけるのは、まだ早かったのでは？」

「いや、それでいいんだ。後で説明するよ」

「と、いうことは！」

探偵は微笑んでから付け足した。

「しかし、何年か経って消えてしまう危険性があるものには隠さないだろうね」

「確かに置き物や絵などは、よほど大事にしているものでないと売ったり捨てたりしてしまいそうですもんね」

それから何か思い出したように宙を見て、「でも」とつぶやいた。「先生がさっき、猫の置き物があるか訊きましたのは？」

「それは、屋上付近にあるかどうかが問題なんだ」

「……？」

「デオートさんたちが彼女に禁止されていたということにあるなら、安全だと思ったからだよ」

そこで探偵は視線を落として、扉付近に敷かれた約一メートルの  
しっかりした人工芝を見た。

「特にこういう——あってもなくても気にしないような、何気ない  
ものにこそ隠すんじゃないかと思ってね」

リーシャは素早くしゃがんで、丁寧な短い草をかき分けて調べ出  
した。探偵も腰を曲げて、深緑の草一本一本に集中した。

「ここ……おかしくないですか？」

やがてリーシャは、人工芝の一部分を見つめて言った。草丈こそ  
同じだが、どれも尖っているはずの草の先端が、よく見ると握り拳  
一つ分ほど意図的に切られて平らになっている。

「その部分、引っ張ってごらん」

リーシャは言われたとおりにした。すると、ズズツと変な音がし  
てすっぽりと抜けてしまった。代わりに、くつきりと猫の顔のよう  
な型の狭い空間が現れた。そしてそこには——

「鍵、発見ですっ！」

その歓喜の声は、下の階にいたデオットとトレントにも届いた。

## PIECE 5…解答

それから約十分後、兄弟もヴェルナンド探偵とリーシャの待つ入口へと上がってきて、目の前で探偵が仕掛けを突破し、やっと屋上へ足を踏み入れようとしていた。

「しかし鍵はどこにあったのだ？」

トレントが訊いたので、すかさずリーシャは猫型に切り抜かれた人工芝を見せた。

「そういうことだったか……何とも意外な。あの文は素直に解釈すればよかったのだな」

リーシャは首を振ってから、「あれはちゃんと暗号だったみたいですよ」と探偵を見た。

「では少し説明を。『だが鳥を狙う隣の奴が鍵を隠し持つ』という文の”鳥”は、前の”The early bird catches the worm.”という英文の”bird”のこと。そして、”隣の奴”とはすぐ右に隠れていたんだ。動詞の”catches”の最初の三文字にね」

「なるほどお！それが”cat”というわけですね」

「でも実際は、あまりヒントになっていなかったようだ。猫と分かっても思い当たるものがなければ、やはり探してみるしかないからね」

「おみごとです。やはりお呼びしてよかった。ありがとうございますました」

このタイミングで依頼者のデオットに深々と頭を下げられたので、リーシャは入口を塞ぐ彼の横を通り抜けて、一番に屋上へ走って叫んだ。

「まだ早いです！」

デオットが「あっ！」と声をあげてリーシャを止めようとしたが、体勢を崩しそうになってすぐにトレントに支えられた。

しかしリーシャはおかまいなしに「どうしたんですか？」と訊いた。

「屋上の鍵を開けることが目的ではなかったはずですよねえ」

探偵は彼女に悪気がないことを知っていたので、黙っていた。

「い、いや……そうだな」

すでにリーシャの手の先に郵便ポスト程の怪しい鉄の箱があったので、デオットも屋上へ足を踏み入れた。

「きっと答えはこの中にありますよ」

改めて四人は初めて到達した屋上を見渡した。そこは思ったよりも殺風景で、不自然に置かれたその箱に、皆一目で気がついた。

「開けてみるよ、兄さん」

「待て、私も」

四方にきつちりとされた錠をはずすのに少々時間がかかったが、デオットとトレントは、いよいよその重々しい鉄のふたをゆっくり持ち上げた。その中からは、また小さな箱が現れた。しかしその箱は決して美しいとは言えないものだった。価値のなさそうな質素なもので、その中身を確かめる必要があった。そこで慎重に手を伸ばし、中を見ると――。

それについて数秒は誰もが言葉を失った。やがてリーシャが躊躇いながら、その答えを口にした。

「カラ」……ですか」

他の三人はすぐに反論しなかったが、決して本当に箱の中に何も入っていなかったわけではない。”空”という一文字が書いてある分厚い紙が出てきたのだ。

「とんだ悪戯だ！」

そう叫んだデオットの手は激しく震え出し、顔には血が上っていた。

何年も追い求めた愛する人の最期のメッセージがこれだなんて、ひどい話だ。リーシャは同情の眼差しを向けた。探偵はただじっと

デオットの様子を見ていた。

「兄さん、違う！」

トレントは落ち着かせようとデオットの背中に手をあてて言った。  
「忘れたのか。ママが俺らに最初にかけた言葉を。これは”ソラ”と読むのだ」

それからデオットが何か言う前に、勝手に喋り出した。

「ママは優しくこう言った。『あなたたちが生まれた時から空はずっと見守っている。毎日泣いたり笑ったり一緒にしてる。例え大好きな人が消えてしまっても、空だけは裏切ることなく必ずあなたたちの頭上を照らす。だから安心してここへ来なさい』——とな」

その場にいた者は皆、無意識に上を見上げた。雲一つない快晴の空を飛行機雲が占領している。太陽は気づかぬうちにゆっくりと沈みかけ、また同時にそれぞれの影を長く伸ばしていることも知り得なかった。

しばらくして、デオットは頭を抱えて「なるほど」とつぶやいた。  
「そういう風にもとれるな……。私は現実を受け入れることに苦労して、過去の素晴らしい思い出を自分で失くしていたのだ」

それから探偵とリーシャを交互に見て、再び頭を下げた。

「お二人には本当に感謝している。依頼料はどれほどだろうか」

その言葉に探偵は素早く手をあげた。

「いや、仕事のために来たものではありませんから、それには及びません」

「元々先生は今日、お休みの日だったんですよ。本当に興味本位です」

リーシャも口をはさむ。

「すまない……。では買い物を頼まれてくれた代金だけお受け取りになってくだされ」

トレントは無言で服のポケットから薄い封筒を取り出すと、探偵に両手で差し出した。

それを何も言わずに受け取り、デオットをちらと一瞬見てから探



偵は言った。

「それでは、僕はこれで」

一礼して早々と立ち去ろうとする背中をリーシャが追う。

トレントも二人の後についていこうとして、足を止めた。それを見てデオットが早口に言った。

「お前も行ってくれ。私はどうせ一人では降りられぬ。見送りにもたまたするのはいみじもない。お二方には失礼だが私はもう少しここに残っておる」

トレントは短く「分かった」と返事をして、急いで二人についていった。

「先生、何か怒ってます？」

「どうしてそう思うんだい？」

リーシャはそれについて上手く答えることができなかった。

すると探偵は急に振り返って、言った。

「質問があります」

どうやらそれは、二階まで下がった所でいつの間にか追いついていた、トレントに向けてだったようだ。

「お兄さんの脚は、いつごろ怪我されたのですか？」

「三か月前だ。その時は早朝だったから俺は寝ていたのだが、大きな音と叫び声で目が覚めて飛んでいくと、階段から落ちて骨を折った兄を見つけたのだ」

「どの階段ですか？」

「ちょうど今降りてきた――屋上へ行く階段だ。あそこは昼間でなければ足もとが暗くて危ない」

「階段で転んだのは、それが初めてですか？」

「うむ。俺はしょっちゅうこの階段でつまづいていたのだが、兄さんは普段は注意深い人で、そのようなことはなかったように思う。

……いや、そういうば、ママがまだ生存していた頃に一度あったな。同じような時刻に階段の方でドスンと音がしたかと思うと、痛いのが

を我慢して慌てて布団に帰ってきた兄さんを見たことがある」

「その時、何かお聞きになりましたか？」

「俺が心配して『どうしたか』と尋ねると、ただ『誰にも言うな』と。どうしてそんなことを言うのか見当もつかず、本人もそう重大視していないようだったので、単に寝ぼけていたのだろうと思い込んでいたよ」

それを聞いて何やら少し考え込むと、今度はリーシャに向かって「先に車に戻っていてくれないか」と言った。

リーシャは探偵の真剣さから察し、質問を我慢して「はい」と返事をした。

「トレントさん、お願いがあります。彼女は一度この慣れない階段で転んでしまったのです。心配ですから下まで傍にいてやってくれないか？」

「ああ、そのつもりだ」

探偵は軽くうなずくと、屋上へまた走った。

後に残された二人は、しばらく狐につままれたように静止していた。

「過保護だな」

トレントがそう唐突につぶやくと、探偵と逆方向に歩き出した。

「優しいだけです」

頬を膨らませたリーシャは、すぐにそう訂正した。

しかし分かっていた。探偵は何か考えがあるのだ。きっと私たち二人に聞かれたくないような話をしに行ったのだ、と。

## PIECE 6..現実

冷たい鉄の箱は、まだそこに答えを残したまま存在していた。紙切れを入れた小さな箱一つ分のためにしては、この底は深すぎたのだ。

もう空っぽのはずのそれを覗くと、角にわずかにへこみがあった。指をひっかけて持ち上げてみる。ガコンと音がし、やっと目の前に”この世で一番美しいもの”が姿を現した。

——箱。丁寧に布で包まれて紐で結ばれている。それをほどいて、中身を手に取る。

手すりにもたれて無意識についた長いため息は、震えて途切れ途切れになった。

「やっぱり、気がついていたんですね」

デオットは目を見開いて、声のする方に顔を向けた。同時に、手に持っていたものをしまつて、それを元あった鉄の箱へと戻す。そして何事もなかったように訊いた。

「どうして戻ってきたのですか？」

その質問に、入口に立つヴェルナンド探偵は、はっきりと言った。

「あなたが確信している別の答えを確かめたかったのです」

「答えなら、もう出たじゃありませんか」

「いや、トレントさんが”空”と読むと説明した時、あなたは『そうともとれる』と言いました。自分の考えを妥協していない証拠です」

デオットは無表情で灰色の地面を見ていた。

「ママに夫がいたというのは事実ですか？」

「もちろんです」

「では、なぜどこにも仏壇がないのでしょうか。お墓はあるのですか？」

「……関係などありませんか」

「ええ。なぜならそれこそが、本当の意味を示すものなんですから。あなたが見て知ってしまった、彼女の愛する夫の――」

「言うな！やめてくれ！……あまりにも残酷というものです」

怯えたようなその眼で睨み、探偵の口を閉ざした。それから幾分か落ち着きを取り戻して、「前に一度、見てしまったのです」と自ら語り出した。

「皆寝ていたある早朝のことでした。私はなぜか目が覚めてしまって、屋上から光が洩れているのに偶然気がつきました。不思議に思っ  
て階段を上がってみると、出入り禁止のはずのドアが開いていました。その先にはママがいて、何やら笑っているようなのです。そして微かに残る月明かりに照らされて、ママの手の中にあるそれを見た時、私は身も凍るような恐怖を覚えました」

数秒の沈黙の後、隠した箱を取り出して前へ見せながら、その答えを口にした。

「――骨です。恐らくママの死んだ夫の」

箱の中に無残に収まった白い遺骨は、見るに堪えなかった。

「リーシャさんが正しかった。あれは”カラ”と読むのですよ。人間のカラー――すなわち”死”を意味するのです」

「デオットさん、それを受け入れることはできませんか」

「彼女は死ぬことを嫌だと思っていなかった！悲しみもせずに私たちをまた置き去りにしたことや、今まで励ましてくれたことさえもが腹立たしく感じて……急に裏切りとしか思えなくなってしまったのですよ。それと、ずっと一緒に過ごした日々が嘘のようで、崩れていくようで、怖かった！」

「一人で抱えるには重すぎます。だから最初から、扉が開いたら僕たちを帰す気だったのですね？トレントさんと二人きりで全てを話すために」

「ああ、そうです。今までずっとトレントや他の家族たちには見せまいと遠ざけてきたのですが、今になってあいつがどうにも言い訳できぬ程知りたがったので、渋々あなたの所に手紙を出すことを許

したのです。その時にトレントには話そうと決心しておりました。が、実際あんな風に言われたら言い出せなくなってしまうて……」

「これは憶測ですが、僕を呼ばなくても、あなたは扉を開けることができているのではないですか？」

「はい、実は。鍵の在り処は最初に屋上でママを見た時に知っていましたし、暗証番号も血眼になって必死に考えました結果、分かったのです。そしてちゃんと確かめようとやっと思い立って、一人でこっそり階段を上がっていく途中で、転んで脚を怪我してしまい、それから一人で上までいくのが困難になってしまいました。その時思ったのです。『忘れなさい』と、神は私に告げているのだと」

「しかしその後、先ほど話されたことがあって――」

「はい。今さら扉の仕掛けを解いたと口にするのも気が引けたし、何よりも……別の誰かにいてほしかったのです」

探偵は目を細めて聞いていた。続けて「自己嫌悪の塊です」とデオットは告白した。

「双子というのは不思議で、時々自分を見ているような気分になるのです。何も知らないトレントが言うことは正しいのかもしれない。だから自分もいい方に現実を塗り替えてしまえばいい、と思ってしまうのが嫌なのです」

そこまで言って、寄りかかっていた手すりから一度離れ、向き直って今度は手をかけて遠くを見つめた。

「私は、どうしたら……何もかも失ってしまった」

探偵はデオットに数歩近づいて、静かに言った。

「人間は生まれてきた以上、生きなければならぬ。それは、時が来れば誰でも死は訪れるからです。だから彼女はこう考えたのではないのでしょうか。どんな人間も最期には美しくあることができる。力の限り生きた証を消すのではなく、焼きつける瞬間に輝けるのだと――違いますか？」

「そう……思えてきましたよ」

デオットは振り向くと、そのまま探偵の方へ力なく足を引きずっ

て歩き出した。探偵はすぐに肩を貸す。

「誰でもよかった。でも——あなたでよかった」

目を閉じてそうつぶやくデオットは、楽しそうだった。

それからしばらくして、「兄さん」と呼ぶ声の下から聞こえた。

「すまん兄さん、待たせてしまったな」

トレントが探偵の代わりに肩を貸し、階段を下りてゆこうとする。

探偵は見送りながら最後に、「折角来たので一つ言っておきます」と真剣な口調をした。それから少し笑って、デオットに言った。

「捕まえるためにウナギを死なせてしまっても、食べてしまえば幸せになれるんですよ」

「……兄さんたちは一体、何の話をしていたんだ」

トレントは首を傾げたが、デオットは「そうか」と大声で笑った。その二人の背中からは、空の暖かいオレンジ色に染まっていた。

## PIECE 7..検証

大人しく助手席に座っていたリーシャは、ヴェルナンド探偵がやってくると顔つきを変えた。それはまるで、尋問する刑事のだった。二人はデオットとトレントに一礼してから、車を走らせた。

リーシャは探偵に訊いた。

「先生、なぜ戻ったんです？」

「デオットさんに話があってね」

「確かに答えには少しがっかりしましたが、二人とも納得していたみたいですし、解決できてよかったじゃないですか」

「そう、かな」

「間違っているのなら、教えてください」

「じゃありーシャ、パンダは何色だい？」

「……白黒です」

「それは毛の色だね。パンダの元の色はピンクだよ」

「ああ！確かにそうですね、考えたこともありませんでした」

「表面だけで満足して、裏に隠れた実情を知ろうとしないから、一つの観念が固定されてしまうんだ」

「なるほどお。つまり今回のことも、何か裏事情があったわけですね」

「そういうこと。でもそれを知ること、今まで順調にやってきて表面上ハッピーエンドを迎えたものが、一気に崩れ去ってしまうケースもある」

「知らない方が幸せてことですか……」

「例えば、生きたウナギをつかむことは容易だと思ukai？」

「いいえ。ぬるぬるしている上に動いたら、難しいです」

「じゃあそのぬるぬるを取り除いたらどうなる？」

「うーん……でも、生きていることには変わりないし」

「いや、そうするとウナギは死んでしまうんだ」

「えっ!？」

「とらえたいものの自体が無駄になってしまう。そこまでして深入りしようとは思わないだろうね」

「でも先生は、デオットさんにそれを話したんですよね？」

「あの人はトレントさんと違ってすでに知ってしまって、思い悩んでいたようだから……。望んだ結果にならなくても、現実を受け入れることができれば、考え次第でよくもなるということを伝えるに行ったんだ」

「そう、ですか」

これ以上はやめておこうと思い、最後に相づちだけ打っておいた。車内はしばらく沈黙を保ったが、リーシャは話題を変えるため、また口を開いた。

「まだ”空”という漢字は、”クウ”とも読めます」

探偵は黙ってうなずいた。

「私はその意味を勝手に考えたんですけど——聞いてもらえますか？」

「それは聞きたいね」

少し照れて笑うと、それに応えて「それは”空間”を意味していると思ったんです」と始めた。

「今までの全ての広がりには自分がそこに存在している証明で、それは人それぞれ違う、一種の奇跡——そういう考えこそが美しいものなんじゃないかって。それから、”時間”の対義語であることから、『過去にとらわれないで前だけを見て生きてほしい』ってメッセーじだったんじゃないかと……」

探偵は複雑な表情をしていた。リーシャはどれにかまわず、独り言のようにつぶやいた。

「はつきりと答えを示していなかったのは、ハッピーエンドを自ら作ることが可能だということです——例えそれがこじつけだとしても。だから事情を知らない私は、そういうことにしたいと思います」  
やがて二人を乗せた車は赤信号に止められて、エンジン音だけを



響かせた。

「なるほどね」

探偵は目を閉じてぽつりと言った。その表情には先ほどの曇りが一切なく、ただ微笑んでいた。

そして信号機の青いランプが光ると、重いアクセルを踏んだ。

「ありがとうございました」

探偵に自分の家の前まで送ってもらったお礼を、リーシャは言った。

「今日は楽しかったです」

「少し遅くなってしまったようだけど……」

「大丈夫です。今夜両親は出かけてしまっているんですから」

リーシャは自慢するように自宅の鍵を見せた。それから笑顔で「さようなら」と言った。

探偵は片手をあげて「おやすみ」と言った。

探偵が車に戻ると、窓を少し開けて風を感じながら、帰るべき場所へ向けて再びアクセルを踏んだ。

## **PIECE 7：検証（後書き）**

あなたは”空”を直感で何と読みましたか？  
どの結末を信じるかは、読者様次第です。

## おまけ：探偵のちぐはぐ乱闘記（前書き）

本文とは全く関係がありませんので、短編コメディとしてお読みください。

## おまけ：探偵のちぐはぐ乱闘記

その晩、リーシャの悲鳴でことは始まった。

「はい。こちらヴェルナンドー」

「あの、もしもし！先生、私どうしたら……」

「その声はリーシャだね。何かあったのかい？」

「……出たんです」

「え、何だって？幽霊なんて言わないでくれよ」

「そんなんじゃないません！現に今もいるんです！助けてください  
よお」

今にも泣き出しそうな調子のまま小声で叫ぶような状況。そして  
リーシャは今までこんな夜遅くに電話することなどなかった。そこ  
から探偵は瞬時に思考回路を巡らせ、一つの結論を導いた。

もしや——侵入者？

「リーシャ、家族は？今君はどこにいるんだい？」

「両親はお通夜に行ってしまったて、当分帰ってきません。私は怖く  
て押入れにいます」

「まだやつはいるのかい？」

「多分……さっきバタバタと音がしていたので、まだ家の中です」  
「特徴は？」

「影だけ一瞬見ただけなのでよくは分かりませんが、とにかく真っ  
黒で。それに、薄暗い部屋のわずかな明かりに照らされて、光った  
んですよ！もう、気味が悪くてえ」

光る……？まさか、ナイフを所持しているのか。

しかし実際に効果音をつけるなら「テカッ」の方で、探偵が思う  
「キラッ」ではなかった。

「警察に連絡し——」

と、受話器から突然ボタンと大きな音がして、リーシャの声にな

らない叫びが聞こえた。

「大丈夫かい、リーシャ！」

「はゝあ……へ、平気です。もうあいつは向こうへ行きましたから。視界に入ったのでちょっと驚いてしまいました」

「確か君の家はマンションだったね。隣の部屋には誰かいるのかい？」

「いません。おじいさんが一人住んでいましたが、今朝に衰死したと聞いて、それで両親がそのお通夜に」

「え、水死だって!？」

残念ながら、探偵は初めに悪い方に推理してしまうのが癖であった。

従って探偵の脳は、今の状況とその間違った事実を結びつけて、勝手に事件性があると判断していた。

隣人が何者かに殺され、その証拠をリーシャかその家族が握っていた。だからそれを持ち去って隠滅しようとしたか、あるいはリーシャ自身を口封じのために襲おうとしたか――と。

「落ち着いて、ちょっと考察してみないか」

「絞殺<sup>絞殺</sup>って！それができないからこうして――って、あれ？そういうば、やつに首はあるのでしょうか」

残念ながら、リーシャはやつをやっつけることで頭がいっぱいだった。

「何を言っているんだい？……まあ、今度僕が視察することにしよう」

「えええー！何で刺殺<sup>刺殺</sup>なんかするんですかっ」

残念ながら、やはり、そうであった。

リーシャはあらゆる鋭利なものを想像してやつを刺してみるが、どれも上手く串刺しにできず、気持ち悪さもあって途中であきらめた。

「何でって、危険だからだよ」

質問の意味を理解できずに、探偵はそう言った。

その後、受話器からは少しの間何も聞こえなかった。探偵が心配して口を開きかけた時だった。やっとリーシャの安堵のため息が漏れて、探偵に告げた。

「今、窓から出ていきましたよ！よかったあ、窓開けておいて」

「……開けてたから入ってきたんじゃないかな」

「ああ、そうかもしれないです。湧いて出るわけじゃあないですもんね」

そう言って笑ったが、リーシャはすぐに、やつが外から入ってくる方がおかしいと思い直した。

「怪我はないかい？あと、何か盗られたものは？」

押入れから飛び降りてトスンと軽い音をさせながら、「私は平気です」と報告した。そして歩いて家の中を探索し出した。

「うーんと、キッチンの上に置きっぱなしにしていたドーナツは危ないですね。でも、くやしいです。元々それを食べようとしてやつに出会ってしまったんですから。無事だとしても食べる気は起きませんよ」

「それって……」

「え？あ、こんな所にあった！いつも使っている強力撃退スプレーなんですけど、今回は取る暇もなかったです。でもつぶれるのはもちろん、やつの死に際のあの素早い抵抗も嫌なので、自分から外へ出ていってくれて本当によかったです」

それらは探偵の耳にはほとんど聞こえていなかった。なぜなら、聞こうとしなかったからだ。探偵はまさかのオチに、全ての氣力を失っていた。

「そういえば、さっき何か言いかけたか？」

この台詞を受けて、相手がその時言おうとしていたことを口にする可能性は、極めて低かった。

「いや、何でもない。……よかったね」

「はい、ありがとうございました！それでは、おやすみなさい」  
探偵の手に握られて大活躍した受話器は、通信を切ろうと本体に

置かれた瞬間、チン！という冷たい音が虚しく響いた。

まさか、恐れていた正体がゴキブリ<sup>あれ</sup>だったなんて……。

そして——静かな夜の訪れを拒む、第二の叫び声が聞こえた。

「で、出たあ！」

探偵はその声に反射的に窓を見ると、道の真ん中で目を見開いている小太りの髭の男は、近所に住む独身のジュラングだと判明した。それからすぐに外へ飛び出した。

「どうされました？」

ジュラングは、探偵を一目見るなり駆け寄ってきて言った。

「ヴェルナンド探偵ですね！ いやはやあなたに助けを乞います。実は、あすここに——」

彼の指さす先には、ただ草木が風に揺れているばかりだった。

「赤子の幽霊です。さっき、二つの光る眼がこちらを見ていたんですよ」

今度は本当に幽霊か……。正直、実体<sup>こっち</sup>ない者の方が厄介だ。

「なぜ赤子だと？」

「泣き声ですよ。あの辺からオギャアオギャアと聞こえたのです。

近寄ってみても姿はありませんでしたがね」

探偵はあきれてため息をつくのを我慢して、「勘違いされています」と言った。

「その鳴き声の正体は猫ですよ。きつとね」

その瞬間、例の草木から猫が飛び出した。

まだジュラングは目を丸くしていた。

「盛りのついた猫です。近くで聞いたら分かりそうなものですけど……」

すると、やっと自分の間違いに気づき、がはははと豪快に笑った。「いやあ、ついさっき出かける前に観てしまったものですから——番組のオカルト特集を。まさか猫とは思いませんで！」

「ははは……」

探偵も笑った。ただし、苦笑いというやつだ。探偵はその気持ちを、よく理解できてしまうのが悲しかった。

また――女の短い叫び声が探偵の耳に届いた。

「あ、その人！」

その女性は自分に慌てて声をかけるのを見て、今度こそ犯罪者だと探偵は思った。

「ジャックを捕まえてください！」

声に反応して探偵はすぐにかまえる。すごい速さでこちらへ向かってくるものを捕らえようとしたのだ。その時はいつもより必死で、どうして被害者がやつの名前を知っているのかなど考えもなかった。

案の定、それはまたしても的外れであった。

「ガルルルッ！」

どうやら彼女は、飼い犬の散歩中にうっかり手を放してしまったらしい。

ジャックは探偵を襲った。

犬は――残念ながら、探偵が唯一苦手とするものであった……。

こうして、探偵の悲鳴で終わりを告げることとなった。



## おまけ：探偵のちぐはぐ乱闘記（後書き）

どうも、海上なつです。

初の連載完結です（長編ではないけれど）！

こんなに時間がかかってしまいました。しかも小説を書き始めて大分経つのにこれです。いやはや途中で自然消滅した小説は何作か：  
：自分が末恐ろしい。

最後になりましたが、全ての読者にお礼申し上げます。できましたら意見・感想もぜひ。

それではまた、次の機会に！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3701g/>

---

Missing Last Piece

2010年10月8日15時56分発行